

# 明治初期東京大学医学生の学生生活（その二）

川俣 昭 男

先に明治十六年卒業の東京大学医学生について報告したが<sup>①</sup>（以下前報と称する）、その後読者より諸情報のご提供を頂き、（その二）としてまとめ報告する。尚引用文については、読みやすくするため一部改行した。

明治七年、お雇い外国人医師ミュルレル、ホフマンは任期が切れ、皇室の侍医として宮内省雇務の状況になった。

前報でも述べたように、『文部省第二年報（明治七年）』に「東京医学学校は明治七年より八年の冬学期の初めに新に百二十一名を増す」とあるが、明治政府の西洋医の速成方針を拒否し、「ドイツ人教師による予科三年、本科五年という、結果的には少数精鋭主義の教育は引き続き行われた。しかし明治十年東京大学が発足するまでの入学事情には様々なケースがあり、前報で紹介した佐々木曠のように、ミュルレル、ホフマンによる体格検査後（落とされた者もいた）、ドイツ語、地理、歴史、算術等の学科試験を受け入学を許可された

ものばかりではなかった。以下三例を紹介する。

## 入学事情

### （一）長崎医学学校の廃校と東京医学学校への転籍

長崎医学学校のルーツは安政四年（一八五七）十一月十二日、オランダ海軍軍医ポンペ・ファン・メールデルフォルトによる長崎奉行所西役所での医学伝習所（現長崎県庁所在地）である。その後医学所・養成所、精得館を経て、明治元年、長崎府医学学校と改称され、明治二年長崎県病院医学学校、更に明治四年文部省所管になり長崎医学学校と改称された。

この間松本良順、佐藤尚中、長与専齋などの数々の医学教育者が輩出している。

明治五年 第六大学区医学学校、明治六年 第五大学区医学学校と改称され、明治七年再度、長崎医学学校と改称された。

明治七年（一八七四年）八月二十七日、長谷川泰が校長に任命さ

れ、同年九月二十八日着任した。

同年十月十二日、**征台の役**(注)に当たり、長崎病院を公兵員病院とすべく、長崎医学校を廃止し、医学校及び病院は蛮地事務(支局)病院となった。(2)

(注) 暴風で遭難し、台湾に漂着した琉球漁民を台湾の現地人が殺害しとことにより、台湾征討が明治政府で決定され、西郷従道が指揮官として長崎より出発した。校長の長谷川泰は主な蔵書や器具を東京医学校へ移管し、一部の生徒も転学させた。東京医学校は直前の明治七年十月、長与専齋が校長になっていた。

『文部省第一年報(明治六年)』によると、長崎医学校の学科や生徒数は表1の通りであった。

表1 長崎医学校概要

医学予科	ラテン語 六時間 計三十六時間	ドイツ語 十八時間 回復読 十二時間
医学本科	病理及内科各論 十二時間 有機化学 六時間	記載解剖 六時間 理学 九時間 計三十九時間
学校職員	二十五人	
外国教師	医学教師 二人	ドイツ語ラテン語学教師 一人
医学生徒	予科 第四級	三十三人
	本科 第七級	五人
	同 第八級	十一人
	同 第九級	十三人
	同 第十級	十三人
	総計	七十四人

(注) 生徒総計は七十五人で現報は誤りである。

川原邦太郎は明治四年長崎医学校へ藩費生として入学した。(3)  
長崎医学校には貧困学生に対する貸費生規則があり(明治六年十二月廃止)、明治六年、川原邦太郎より医学校給貸願いが出されていて、文部省に認可された。これに関し長崎県と文部省の間に往復した文書がある。(2)

其県生徒別紙姓名書之者共第六大学区医学校ニ於テ学業試験致候  
処後來成業之目的有之候得共貧困ニシテ学資難自弁依テ即今ヨリ  
向何年間学資給貸願出候然ニ医学校入舎之儀ハ極減少致候テ大凡  
一ヶ月七八円入費相掛ケ候得ハ修業相成候間本人申立之通実以父  
兄親族ヨリ右の学資支給難相成者哉其実否嚴密取糺至急可届出此  
段相達候也

明治六年四月四日

文部省

長崎県

第六大学区医学校給貸願出生徒姓名

長崎県士族

向フ五年間

川原邦太郎

同

五ヶ年

諸原小太郎

五月十二日返事済(朱)

川原汎（邦太郎）の日記<sup>(4)</sup>より

「明治七年台湾征伐ニ際シテ長崎医学校ハ廃止セラレテ老生等官費生ハ直ニ時ノ文部少函<sup>マ</sup> 辻新次（今ハ男爵）ニ召連レラレ上京東京医学校ニ入学セシメラレタリ 其他私費生ノ少壯輩モ多数ハ依然転校セリ 今ノ衆議院議員山根正次ノ如キ是ナリ 然ルニ大岡ハ医校ニハ来ラズ 或代言人（今ノ弁護士）ノ書生トナリ居ルトノコトヲ仄ニ聞キ居タリシニ明治十二三年頃ニハ独立ノ代言人ニナリ萬世橋畔淡路町ニ門戸ヲ開キ居レルヲ同窓ニテ矢張り長崎来ノ山根文策聞キ出シ訪問セシニ其隣家ノ洋食店ニ招待シ晚餐ヲ饗応シタリト伝ヘタリ 老生モ其後一度訪問セシニ同ジク隣家ニ到リ洋食ヲ饗セラレタルコトアリ」

生徒は全員転学したのではなく、また在学期間により進路が異なつた。

山根正次は医学部本科を明治十五年卒業していることから、明治七年十一月に二等予科に編入したことが推定され、また鶴崎平三郎（後述）のように入学後日が浅く、上京してドイツ語の家塾および東京外国語学校を経て、明治八年十一月に二等予科に編入した者もいる。

山根文策、浦島賢吉等は川原と同時に転学したものと思われる。<sup>(5)</sup>

## （二）京都府よりの推薦入学 劉小一郎

「明治六年二月ヨリ七年十月マデ京都府立病院ニ於テ外国教師<sup>マ</sup>コシケル氏ニ従テ医学修行、同病院長 半井澄氏ニ従テ医術 原書

を伝習ス 七年十一月京都府ヨリ推サレテ東京大学<sup>マ</sup>医学部第三等予科生ニ入り十六季ヲ経十五年全科を卒へ十六年五月初メ卒業シ医学士ノ学位ヲ受ケ十六年七月三日徳島県立医学校一等教諭、年俸千四百十円ヲ給ル」  
〔劉家蔵資料より〕

明治の初め東京遷都で京都の町は寂れた。京都府参事 横村正直は顧問の山本覚馬と若いエリート医師、府小属の明石博高の力を得て京都を近代化した。

明石は京都に病院を作ることを計画し、明治五年仏教界の有力者の賛同を得て、京都療病院を開院した。政府がドイツ医学採用を決定したので、ドイツ人医師を招聘することにした。明治五年九月七日大阪在住のドイツ人貿易商の紹介で、ヨンケル・フォン・ランゲツグが赴任した。ドイツ語の読み書きや会話の出来る日本人は殆ど居なかつたので、英語が話せ、オランダ語も話せるドイツ人という条件を付けた結果、イギリス国籍を持つドイツ人ヨンケルが着任した。外来診療と学生（入塾と通学生）に対して教育を始めた。半井澄<sup>サヤカ</sup>は市中医師のため通訳をした。ヨンケルの評判は悪く明治九年解雇され、マンスフェルトに換わつた。<sup>(6) (7)</sup>

明治初期の大学東校時代に、藩の推薦で無試験、学費免除で入学できた貢進生の制度が一部残っていたものと推定される。

## （三）東京外国語学校独逸語科から二等予科へ編入

東京外国語学校は官立の外国語教育機関で、語学の他に理数科、

地理、歴史等を教え、東京医学校予科と科目が重複していた。予科で最も重点を置いたのはドイツ語であり、東京外国語学校出身者は、合格すれば二等生に編入が可能だったものと思われる。

『文部省第二年报（明治七年）』によると、同校の独逸語学生数は表2の通りである。

表2

下等一級	下等二級	下等三級	下等四級	下等五級	下等六級	総計
廿八人	廿七人	三十二人	廿九人	廿六人	四十五人	百七十九人

明治七年三月在校生であり明治十六年に医学部を卒業した者は次の通りである。<sup>(8)</sup>

下等第二級 河本重次郎、齋藤駒吉（為信）

下等第三級 真部於菟也

下等第六級 千原春輔、池田陽一、鈴木規矩二

参考までに他の学年卒の生徒を記す。

下等第一級 江口襄（明治十四年卒業）

下等第二級 猪子止戈之助（明治十五年卒業）

下等第四級 浅山郁太郎（明治十七年卒業）

### 河本重次郎<sup>(9)</sup>

前報と重複するが、普仏戦争でプロシアが大勝利を取めたので、ドイツ語を学ばば役立つと思ひ、横浜高島学校でドイツ語を始め、更に東京外国語学校でドイツ語を主体に地理、歴史、数学を学んだ。

明治七年、入学のため、藤堂屋敷にある東校（下谷和泉橋）に行きミユルレル、ホフマン及び三宅秀の居る中で体格検査を受けたが、重度の近眼のため入学できなかった。併しその翌年の明治八年、体格検査無しに今の東京医科大学の時計台下の部屋でランゲによる独逸語のみの試験を受け、医学科予備に入学できた。

この時は既に本郷の旧加賀藩邸に医学校の建設が進んで居り、そこで試験を受けた事を示している。

（注）下谷和泉橋から本郷加賀藩邸址に移転する話は、明治七年

十月、長与専齋が東京医学校長になった時点で起こり、翌

八年校舎・病院の建設が始まった。翌九年十一月廿七日に

医学校は新校舎に移転し、十二月六日ここで開業式を行った。<sup>(6)</sup>

### 大谷周庵<sup>(10)</sup>

「明治七年二月和泉橋なる大学東校の入学試験を受けたるに、学科は首尾能く及第せるも、年令不足の爲め入学を許されず。依りて下谷練堀町の春風舎と称する司馬盈之（凌海）氏経営の独逸語の私塾に入舎せり。居ること四ヶ月塾の先輩藤田嗣章氏の勧めにより、同年七月外国語学校に入学して専ら独逸語を習得せり。翌明治八年十一月永年の宿望遂に達せられ大学東校の予科に転学を許され、修業二カ年の課程を終へ、更に五カ年の本科を修了し、目出度医学士の称号を得たり。」

大学東校は廃藩置県前の明治四年までの名称で、八年十一月には既に東京医学校と改称されていた。

二等予科生に転入したことを示している。

#### 鶴崎平三郎<sup>①</sup>

「明治七年春第五大学区医学校（長崎医学校）入学 専独逸及び羅典語学ヲ修ム 同秋本校被廢故ニ直ニ東京ニ遊ビ壬申義塾及び東京外国語学校ニ於テ独逸語学且ツ算術ヲ学フ

明治八年十一月東京大学医学部（当時東京医学校ト称エリ）入学

本部の学制ニ従ヒ毎年春秋の定期試問ヲ歴テ同十三年秋ニ至リ医学理科試問ヲ遂ゲ同十五年十月医学全科を卒エリ 同十六年三月東京大学医学本科卒業試問規則ニ従ヒ試業ヲ初メ同五月上旬其ノ業ヲ完成セリ 直ニ兵庫県ノ招聘ニ応シ同三十一日県立神戸医学校一等教諭ニ任セラル

右は自筆の履歷書で、前述した長崎医学校に入学したが、間もなく廃校になり、そのまま東京医学校への転学は出来ず、壬申義塾、東京外国語学校を経てドイツ語等を学び、明治八年十一月、医学科二等予科生に転入したことを示している。

#### 池田陽一<sup>②</sup>

「明治七年十五歳の時、東京外国語学校ドイツ語科に入学した。ドイツは当時ビスマルクの全盛時代で、明治三年大國フランスを破り、新興の意気に燃える武の國、科学の國であった。多感の少年が新興科学の國、ドイツにひかれるのも不自然ではなかった。

陽一少年がドイツ語を選んだことも突飛な物好きでもなく、父に似て積極進取の一面がうかがえる。そしてドイツ語に練達したことが学問の道に進んだ池田陽一を輝くものにした。

明治十年外国語学校を中退、大学予備門を受験し、成績優秀のため一足とびに二年級に編入された。

明治十六年東大を卒業し、十一月、のちの九大医学部長大森博士に招かれ、福岡医学校教諭兼産婦人科部長を命ぜられた。

（注）東京大学が明治十年設立された時、東京英語学校が大学予備門になり、法、文、理学部入学のための予備校になった。医学部は予科へ入学しなければならなかった。また後述するように明治八年には池田は河本と同級の二等予科生に在籍しており、大学予備門ではなく明治八年東京医学校二等予科生に編入したものと思われる。

尚、その後、明治十五年六月医学部予科を廢止し、その生徒を大學予備門に編入した。

河本重次郎『回顧録』<sup>(9)</sup>には

「余が入学するや、実は吾々は、外国語学校から来たものであるが、他の諸君は藤堂屋敷より、皆移り来られたものである、独逸語だけは少々長者の方であつた、「中略」余は北里、大谷、池田、鶴崎君杯と同級であつた、」とあり、ここで言う「藤堂屋敷より移り来られたもの」とは、明治七年十一月に三等予科生に入学したものを示したものと思われる。従つて、明治十六年卒業生の入学は次の二通りになる。

①三等予科生として明治七年十一月入学

北里柴三郎<sup>(10)</sup>、中島幸次郎(孚)<sup>(11)</sup>、佐々木曠<sup>(12)</sup>、川原邦太郎(汎)<sup>(13)</sup>、劉小一郎、山根文策、浦島賢吉等

②二等予科生として明治八年十一月東京外国語学校より編入

河本重次郎<sup>(14)</sup>、大谷周庵<sup>(15)</sup>、池田陽一、鶴崎平三郎<sup>(16)</sup>、(斉藤駒吉(為信)、(真部於菟也)、(千原春輔)、(鈴木規短治) ( ) 内は東京外国語学校在籍者。

東京外国語学校の状況について、河本重次郎の『回顧録』より引用する。

「余は横浜を去つて東京に移ること、なれり、して学校は外国語学校に入り、専ら独逸学を為せり、其当時は、今の如く小学校も中学校もなく、少なくとも、余は外国語学校で専ら独逸語のみで、

他に国語とか漢学杯は一切やらなんだ、故に今でも本当の文章は出来ぬ、つまり自分が此方の力と云ふは、新聞杯よりの読み覚えである、

外国語学校に居た時の先生には Knippin, Hansen, Witkosky 杯と言ふ独逸人が居て、それに教を受けたが、此中、クニツピンと云ふ人は、立派なやさしき人であつた、

其人は元と甲比丹で船乗りあつたとか云ふ、何んでも「ライン」近傍の人であつたが、地理、氣候学に通じて居た、氏は現今、学士会仮事務所のある所に、御雇西洋人の住宅五六軒あつて、其中に住居して居たが、皆二階のない四角な安普請で、中は大抵皆四つにしきりつめたものであつた。

此クニツピンと云ふは、其当時、日本地図を作つて居られて、余も多少手伝つた、今日独逸にある日本地図は、之を本としたものであると思ふ、

其頃世にある日本地図を皆買集めて、書籍に一杯持ち居られ、して屋の中央に大なる斜面板を架し、其上に地図の台紙を置き、其上を又紙で覆ひ、必要なる所丈切り明けて、暇ある毎にそこに地名を入れる、のであつた。又日本の氣候状態が独逸に知れたるも、クニツピンの力に依るものと思ふ、

氏は毎日の業として、寒温、風雨、風水の速力等一々記されたり、一夏、氏の不在の時、余は其任務を依頼されたるが、家の屋根上に風速計があり、余は雨が降らうが、風が吹かうが、屋根に登りて風速を計測した、一日雷雨の時も、登りてそれを計れり、全く

気象学者の模型を實行せるなり、

余は同氏より学校で地文学を学び、初て地球の大きさ、月の距離を計ることを覚えたり、余は本来、少年時代より地理を好み、其頃日本の地理を折本形に作りし旧式の地図があつた、それを見て何となく喜ぶと云ふ風に、地理には、恰も蝶が花を喜ぶと同じく一種の嗜好を持つて居た、そこで、地文学にも頗る好愛の念が強かつた。

又ハンゼンと云ふ人は、此人は歴史と数学を担任して居たが、其歴史の教へ方は実に面白いもので、全く史上の人物を其場に扮する如き調子であつた、ビスマルク杯の云たこと杯を云て、自分自ら当人である様に話したものであるから、余は大に歴史好きとなり、今日迄、地理と歴史は、他人の知れるよりも、より多く知ることになり、其好愛心より、自然歴史ものは、多く読む様になれり。又ハンゼンは数学を教へたが、さて余は、数学に甚だ無能で困難せり、殊に今でも記憶するが、按分比例ときは、一向に分らない為め、点数甚だ劣点であつた、依て一夏思ふ存分、数学を特別に修学した、それから按分比例も易く出来る様になれり、従て点数も大に上つた、

ハンゼンは飯田町通の山手側に居住し居たが、其時は未だ草茫々であつた、ウヒトコスキと云ふ人は、何処の人か知らぬ、偉大な体格で、人相悪しき人物であつたが、語学の受持であつた。其人は甚だ怒り易き人で余は一度文章を書いて行き、いたく打たれたことがあつた、

「略」余は甚だ不才で、何事にも不出来の方であつた（事實の話なり）。「中略」

余は外国語学校に居た時、若年の考へから、地理学者にならうかと思つた、それは、自分が性来甚だ地理好きの爲めである。余は学校の図書室に至り、亜弗利加の紀行文杯を頻りと読み、益々決心した。

依つて其当時池の端の慶安寺に居た叔父の中江に相談に行つたが、非常に怒られ、今だに叔父の怒つた大目玉が、自分に覚えある程である。それで、其方を止めにして、医学に志す様になつた、「略」これも、判然と明確な志あつてのことではなく、叔父の意見により、漠然と入学するところになつたまでなり。」

尚、東京外国語学校は明治十九年三月廃校になつた。従つて現東京外国語大学の直系のルーツではない。

(注) Kumipin、クニッピンはKunipiping、クニッピングが正しい。

彼は明治十六年三月一日に全国の測候所から電信で気象データを集め天気図を作成し、毎日印刷配布した。翌十七年六月一日、東京气象台で毎日三回全国の天気予報を発表した。これが天気予報の始まりである。

初めての全国天気予報は「Variable winds, changeable, some rain,」全国一般風の向キハ定マリナシ天氣ハ変リ易シ但シ雨天勝

チ」イ・クニツピング<sup>14</sup>

尚、鶴崎平三郎は明治二十二年兵庫県須磨浦に、日本で初めて本格的な結核療養所を設立したが、各地の気象データを調べ、須磨浦は温暖で療養に適していること確認し、土地を選定した。<sup>15</sup> その後も病院内に百葉箱を設け、気象データを取ったと言われ、これも東京外国語学校時代のクニツピングの影響と思われる。

### ドイツ語力

入澤達吉によると

「一切外国教師でやつたので皆独逸語で講義をした。即ち和蘭人のエーキマンの化学、デッセの病理解剖学、スクリバの外科、ベルツの内科及婦人科、皆独逸語でやつた。法医学はスクリバ氏が担任して居つた。皮膚科、小児科などと云ふものは無論なかつた。〔略〕本科、即ち本科医科の学生の独逸文の参考書は、其当時ピンネルの化学書、或はロスコウの化学書、ヨホマンの物理学、解剖はクラウゼ又はゲーゲンバウルの著書、病理解剖学はチーグレル、内科書はストリウンベルか又ハイヒホルストか又はユルゲンセンであつた。眼科はマイエルの書、婦人科産科はシユレーデル、外科はヒューテル、薬物はシユミーデベルヒの書であつた。外にクンツエと云ふ小さい内科書がありました。是は日本でズット古い人が既に翻訳して居りますが、誠に詰らない書物である。併し小さいものであるから、それを下読して試験に出るとベルツさんに

能く叱られた。お前達あんな本を読んではいけないと言はれたことを記憶して居ります、今申しますやうに独逸の教師が多くて、又予科の教授科目の中に、独逸語の時間が非常に多かつたものですから、私共の級などでは最早余程衰へましたが、其数年前の級では、独逸語の達者な人が澤山ありました。

日本文は書けないが、独逸文ならば容易に書けると云ふ人があつた。今生き残つて居る人で元福岡に居つて、今佐賀に開業して居る池田陽一君、神戸に開業して居る山本次郎平君などは独逸文を書くことは自由自在であつた。従つて学生間には独逸語が多く日本語を交へて話された。<sup>16</sup>

河本重次郎の『回顧録』にも次のように記述されている。

「池田陽一君は、今九州で高名であるが、級中で一番若年の方であつた、余とも親しく、今も音信を時々通じて居る、君は其の時分から独逸語達者で、今でも、手紙は独逸文で余せらるゝことが多い、して其文は、全く独逸人の文を見て居る様である、」

また池田陽一履歴の続きには

「前述のように池田はドイツ語に堪能で、ただ洋書を読み文を綴るだけでなく、日常の事柄もほとんどドイツ式で、ドイツ語で処理し、医学に関してばかりでなく、一本の手紙、一葉の葉書もドイツ語で書いた。かつて若い頃、外国語学校時代、難解なドイツ語に習熟するため、辞書丸暗記の無謀を決意し、明敏な頭脳と不撓の努力によつて、ついにその難事を克服した。」<sup>17</sup>

この時代まではドイツ人教師のみであったから、学生達のドイツ語の読み書き、会話能力は最高であったものと思われる。

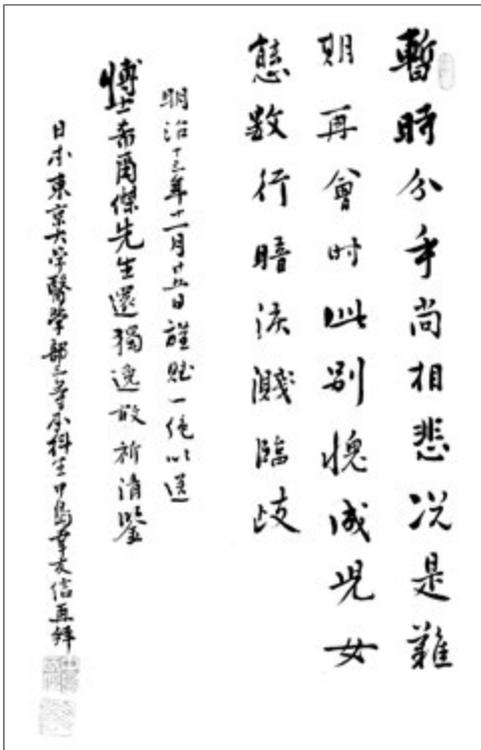
北里柴三郎がコッホとの初対面で、コッホの第一印象は「ドイツ語のうまい日本人」であった。<sup>⑤</sup>

その後ベルツ、スタリバ以外は日本人教師になると、学生のドイツ語能力は衰え、ベルツの講義も聞き取れない学生もでてきた。<sup>⑥</sup>

### 惜別の詩

ドイツ人解剖学教師ギールケ（希爾傑）が明治十三年帰国する際に、同級の中島幸次郎が送った惜別の詩を紹介する。

図1 惜別の詩（東京大学医学図書館蔵）



暫時分乎尚相悲

況是難期再開時

此別愧成兒女態

數行暗淚濺臨歧

明治十三年十一月廿五日謹賦一絶以送

博士希爾傑先生還獨逸敢祈清鑒

日本東京大学醫學部三等本科生中島幸友信再拜

福井県文書館 吉田健主任より、この詩は右記のような七言絶句の詩であり、意識すると

「しばしの別れでも悲しいのに、ましてや、再び会えないこの別れに際し、涙なしにはいられようか。しかし女子供のような振舞いはできないので、涙を隠して別れに臨む」になろうとのご教示をいただいた。

ギールケは明治十三年九月実施された理科試問（前報図4）を担当した後、帰国した。

前報の「佐々木日記」に記述されたように、ドイツ人教師が帰国する際に、ホルツには全員が涙を流し、ミュルレルには全員が新橋駅まで送り、一部の学生に評判の悪かったシユルチエにも西陣織物を贈り、本科生が新橋駅まで送っている。

厳しい教育を受けながらもドイツ人教師に対する学生達の思慕の念がこの詩からも窺える。

表3 明治十六年 医学々生卒業試業成績、卒業日及び赴任時期

(左表) 自二月 至七月卒業試業成績							(右表) 卒業日及び赴任時期		
	第一成績	第二成績	第三成績	全成績	総点数	順序	卒業日	卒業證書番号	赴任時期
北里 柴三郎	丙	乙	乙	乙	40	八	4月21日	第百三号	4月
齋藤 為信	乙	乙	甲	乙	44	五			
内田 守一	乙	乙	甲	乙	47	三			
木村 孝蔵	丙	丙	乙	丙	39	十五			
河本 重次郎	乙	甲	甲	甲	51	一		(第九十六号)	
大谷 周庵	乙	甲	甲	甲	47	二			5月
佐々木 曠	丙	丙	乙	丙	38	十六			4月
千原 春甫	丙	丙	乙	丙	35	十九			
川原 汎	丙	乙	乙	乙	41	六			7月
尾澤 主一	丙	丙	乙	丙	38	十七			
隈川 宗雄	乙	乙	甲	乙	45	四			
池田 陽一	丙	丙	甲	乙	40	九			11月
劉 小一郎	丙	丙	乙	丙	35	廿	5月		7月
中島 孚	病 死							(第九十五号)	
磯 彝	乙	乙	乙	乙	41	七			
岩佐 登弥太	丙	丙	乙	丙	35	廿一			
真部 於菟也	丙	丙	丙	丙	33	廿三			
鶴崎 平三郎	丙	丙	乙	丙	35	廿二	5月24日	第百十七号	5月
南 二郎	丙	丙	丙	丙	34	廿四			
高橋 盛寧	乙	丙	乙	乙	39	十			
浅田 决	乙	丙	丙	丙	35	廿五			8月
浦島 堅吉	丙	乙	乙	乙	39	十一			
中山 専太郎	乙	丙	乙	乙	38	十三			
川俣 四男也	丙	丙	丙	丙	36	十八	7月10日	第百十三号	8月
緒方 太郎	丙	乙	乙	乙	37	十四			
黒柳 誠一郎	丙	丙	乙	丙	35	廿六			
山根 文策	乙	丙	乙	乙	39	十二			
山本 次郎平	欠 席								

(『東大病院だより』No. 60 <sup>(16)</sup>より抜粋)

全成績及び順序(席次)の評価手順は次の通りと推定される。

- ①各学科の成績はドイツ人教師により5(甲)、4(乙)、3(丙)、2(丁)と整数で表示される。
- ②次の各ブロック毎に平均点を計算する。  
 第一成績：骨肉臓論、組織学、局所解剖、生理学の平均点  
 第二成績：外科病床実験、外科理論、眼科の平均点  
 第三成績：内科病床実験、内科理論、薬剂学、産科の平均点
- ③平均点は小数になるので、5~4.5を甲とし5点の配点にする。同様に 4.4~3.5を乙(4点) 3.4~2.5を丙(3点)とする。
- ④全員が試験終了後(7月10日)、全成績、順序は、総点数だけではなく三成績の平均点等も判定の基準にされたものと思われる。

## 改名

明治十五年～十六年、卒業を控えた次の学生達が改名した。

### 改名 (訓読み)

内田 仙太郎	内田 守一 (もりかず)
川原 邦太郎	川原 汎 (ひろし)
中島 幸次郎	中島 孚 (まこと)
高橋 勝三郎	高橋 盛寧 (もりやす)
齋藤 駒吉	齋藤 為信 (ためのお)

親から命名され、古来からよく使われた名前に飽きたらず、医者としての自らの信念、ビジョンをもち、新しい人生を切り開こうとして改名したことが窺える。

## 明治十六年卒業試験成績

表3の左表は成績順ではなく卒業試験が終了した順に並べられたものと推定される。

全国の県立医学校から医学士の需要が高かったため、試験が終了次第、仮卒業書を授与し、任地に赴任したものとと思われる。正式の卒業證書は、下記のように七月十一日に法、文、理、医の四学部に一斉に授与されたが、医学部では実際の卒業月日は各人により異なるため、仮卒業時期が付記されている。

北里の四月二十一日と、川俣の七月十日 (前報図7) には二ヶ月

以上の開きがあるが、幾組にも分け抽選で受験したので<sup>(15)</sup>、卒業試験終了に二～三ヶ月の開きがでたものと思われる。

## 卒業證書授与

「明治十六年七月十一日法理醫文學部卒業ノ學生六十七人ニ卒業證書ヲ授與ス 即チ法學科八人 物理學科一人 化学科八人 機械工學科三人 土木工學科四人 地質學科二人 採鉱冶金學科四人 醫學科廿六人 製藥學科一人 哲學科一人 政治學及理財學科九人ナリ 「其姓名ハ略」 又是年医学部別課医学生徒ノ卒業スルモノ七十八人ニ卒業仮證書ヲ授与ス 即チ三月二十八十五名「其姓名ハ略」 四月二十八十一名 五月二十八十六名 七月二十八八名 八月二十八十八名ナリ」

『文部省十一年報 (明治十六年)』。

表3右表の卒業證書番号は證書の裏面に記載され、北里柴三郎 (北里研究所蔵)、鶴崎平三郎 (鶴崎家蔵)、川俣四男也 (東京大学医学図書館蔵) の番号は試業成績書の順序 (席次) に対応していると思われる。

順序に基づき河本重次郎の番号を推定すると第九十六号になる。第一号は明治十二年、第一回卒業生の首席、清水郁太郎であり<sup>(17)</sup>、明治十五年までの卒業生は九十四名であるため、第九十五号は欠番になる。次項で述べるが、卒業試業中最優等であったにも拘わらず急逝した中島孚に送られたものと推定される。

## 卒業試験中の病死

明治十五年十一月に八年間の教科が終わると、寄宿舎を出て、旧一等生として下宿をしながら卒業試験を受けることになった。十六年二月からの卒業試験に臨んだ学生は三十名であったが、このうち四名が欠落した。次の二名は試験中病死した。

## 鈴木規短次

「群馬県人で、温厚な人であったが、卒業試験中に腸「チフス」に罹り死去された、其葬儀に実父も見えたが、余程落胆な様子であったこと、今でも記憶するが、さもあるべきことで、「略」余は一夏、此鈴木君と同下宿に居たことがある、それは、自分脚氣のあつた時であつた。」<sup>(9)</sup>

## 中島孚

熊本県人で北里柴三郎と同時に上京し東京医学学校に入った<sup>(5)</sup>。河本重次郎も「温厚な人物で能く出来た、卒業の頃、燐れや此世を去つたが、谷中天王寺の墓地の片隅に眠つて居る筈」と書いている。<sup>(9)</sup>

入澤達吉も「五等本科の中島と云ふ人は卒業試験の途中で死んだが、非常に優等の成績であつたために「贈醫學士」と云ふ称号をやつたと聞いている。墓は谷中にあつたと思う。」と書いている。<sup>(10)</sup>

明治十六年十月二十七日東京大学学位授与式に於いて、加藤弘之総理は祝辞のなかで、中島の急逝について次のように哀悼の意を表した。

「最モ祝スヘキ最モ喜フヘキ此盛会ニ際シ唯一ノ惋惜言フニ忍ヒサルモノアリ医学生中 中島孚ノ病没是ナリ中島孚ハ熊本県平民ニシテ明治七年医学部予科ニ入り夙夜勉勵兩年ノ試業優等ニ居ルモノ多ク漸次昇等シテ遂ニ昨十五年十一月ニ於テ医学全科ヲ完了シ今春ヨリ卒業ノ試問ニ従事シ既ニ其過半ヲ卒ヘ最モ優等ヲ占タリシニ四月上旬俄然肺炎ニ罹リ同月十三日終ニ不帰ノ人トナレリ豈悲哀セサルヘケンヤ同学諸氏カ今日此光榮ヲ享クルト其幸不幸果シテ如何ソヤ」

(『東京横浜毎日新聞』明治十六年十月三十日の記事より)

川原汎は在学中から肺を病んでおり、二十歳頃より嗜み始めた酒を飲みつゝ、試業中は勉強に耽り、突然大量の咯血を来した。ベルツ博士により肺結核と診断され、東大病院で一ヶ月療養して、七月に佐賀県医学学校へ赴任した。着任後三ヶ月でこれを辞し、愛知医学学校一等教諭、愛知病院内科医長として着任した。<sup>(3)</sup>

試験は厳しいもので、厳寒時に受けており、また寄宿舎から下宿へ移り、食住環境の変化も関連していると思われる。藤井善衍の去就は不明である。

山本次郎平は卒業試業を欠席し、翌十七年に卒業した。

岐阜医学校の青田刈り 佐々木曠、大谷周庵

岐阜医学校長、相磯慥は明治一五年卒の医学士で、前報で記載した通り卒業生が無試験で医師免状が得られる甲種医学校を計画した。

このための医学士（東京大学医学部卒業生のみ）三名が居ることが一要件となっており、更に二名を獲得するため、岐阜県衛生課長、山本操を卒業試験の始まったばかりの十六年二月に先ず佐々木曠に接触させた。

更に佐々木と同じ下宿にいた大谷周庵にも声を掛けた。

次の手紙のやり取りがある。

書簡一、岐阜県衛生課長 山本操より佐々木曠へ

益御清栄被為涉奉賀候

此頃は御光来被下失敬之段

御仁免可被下候、其節御相談申候

一条二付別紙差上置候間猶

貴所方ヨリも乍御手数御承諾

之旨一通御回答被下度実者

今日ニモ持参致候積之処公事

多端ニ付以郵便申上候就而者

御回答も郵便ニて御遺し被下度

草々 頓首々々

十六年二月五日 山本操

佐々木曠様

梧右

書簡二、岐阜県衛生課長 山本操より佐々木曠、大谷周庵へ

（封筒表） 東京本郷区弓町二丁目三番地高山十門殿方

佐々木曠殿 大谷周庵殿 書留 親展

（封筒裏） 岐阜県衛生課 山本操

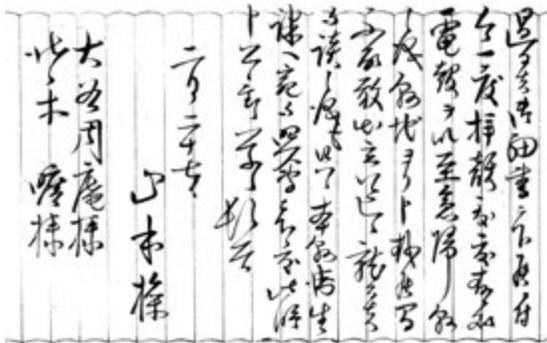


図2 書簡二

過日者御細書被下候二付

今一度拝顔致度存知候処

電報ヲ以至急帰県

之儀県地ヨリ申越候間

不取敢出立いたし候、就而者

御談之儀も候ハバ本県衛生

課へ宛御紹介被下度此段

申上置候 草々 頓首

二月二十七日

山本操

大谷周庵様

佐々木曠様

県議会で甲種医学校設立は了承されたものの、その後文部省から校舎の修繕、機器書籍の充実などを要求され、財政上困難な岐阜県

では対応できず、結局県会で否決され、甲種医学校を諦め、乙種医学校にすることになった。

従つて先に声をかけた佐々木曠のみの招聘に決まり、大谷周庵には謝金（詫び金）を支払うことになり、次の通り医学校長と衛生課長から詫び状がきた。

書簡三、相磯慥校長より佐々木曠へ

拜呈 陳謝過日迂生出京之砌、貴君

御挨拶之儀奉懇願候処、早速御諾話

被下大慶ニ奉存候、猶婦県之節ハ必ず

御面談可仕候筈之処、俄ニ他ニ用事

起り用弁之為メ時間ヲ消費致其力為メ

乗船時限に後れハ、不得止後事ハ佐藤三吉氏

ニ委託し、且課長山本操氏へハ佐藤氏ノ返事次第

貴君へ確答相成度旨申置キ、直ニ横濱ニ立越、

かつハ乗船致候、佐藤氏ノ返事ト申ハ最初貴君へ

御依頼申上候節ハ先づ差当り貴君御名之積ニ候処

大谷君も亦行キテモヨキトノ御言ヲ聞キ喜悅仕候

〔中略〕

大谷君、佐々木君ト予約致候云々、其□迂生よりハ

更ニ此趣通知仕候、爰ニ於テ此事斯ク確定致候、

然ル処、茲ニ甚タ不都合相起候、其訳ハ十五年度ニ

於テ（即昨年県会議決）甲種医学校設立ニ議決シ、

其定額ヲ壹万二千五百余円ニシタリ、昨年来大キニ  
教則ヲ取調へ、文部省へ伺出候処費用不足ニ付、

猶増額致様指令有之、因テ本年ノ県会ノ増額原案ヲ先ツ

常置委員会ニ掛ケ候処、廃案ト相成、故ニ本年度ニ於テハ

甲種ノ議止む、尚ホ文部省よりノ内達ニ校院ヲ修繕シ

機器書籍等購求致様トアリ、又県会よりモ本年度ハ

乙種トナシ、文部省ノ内論ヲ遵奉致度様県会へ申出、

県会ニ於テモ不得止遺憾ながら其事ヲ容レラレタリ、

右ニ付折角御両君ト予約候得共、御名而已外何方にも

本約仕兼候、誰ヲ謝シ誰ヲ招聘スル□ノ点ニ至リテハ

種々協議仕候処、何誰も同しく予約なれハ甚タ六ヶ敷、

遂ニ一番最初御依頼申上候御仁カ当ト決候、然レハ貴君

ニ候故何卒聘応被下度、県庁よりも折入テ頼呉候様申来候、

迂生ハ更ニ奉懇願候、大谷君へハ何トモ申訳無存候、

如斯粗忽なる所業ノ官衙ニ於テ有ル間敷事なれとも、

如何セン県会アリテ自由なし、生県庁始登校ニ於テモ

面目ナク、全ク我々ノ尽力ノ足ラサルノ来ス処なり、

就テハ此段重々謹而奉鳴謝候 頓首

三月十九日 相磯慥

佐々木曠様

書簡四、山本操より佐々木曠へ

過般出京之節貴君并

大谷周庵殿御卒業之上本県  
医学教授トシテ御備聘申

度旨御相談申上ご承諾ニモ相成  
候処豈科本年県会ニテハ更ニ

乙種医学学校之組織ニ決議可相成  
趣左候テハ自然費用も減少致シ  
随テ三名ノ医学学校も要セサル様  
相成可申候間甚乍不本意

県会之決議致無之実以遺憾之至ニ

候得共費用ニ制限も有之候間

貴所御一名ハ御招聘申候共大谷氏ハ

御解キ申度候間右之情実御諒察

被下度貴君ヨリ大谷氏へ宣御断リ

被下度幾重ニモ御取計奉希候

就テハ貴君ハ御出立御赴任相成候哉

否至急以電信御通報被下度

不取敢此段得貴意度如此御座候

草々頓首

十六年三月廿一日

衛生課

山本操

佐々木曠様

二仲貴君御赴任之日限組御決定

相成候ハバ旅費其他御回送可申候間  
以電信御通知被下度候也

書簡五、山本操より佐々木曠へ

春暖之節候得共弥御清栄

奉賀候、陳者三月廿四日附御文

信拝読、今般三井銀行為替券

ヲ以赴任旅費并月棒二ヶ月分

繰合セ左ノ通及御廻送候条、

御査収ノ上請取証書御廻致有之度候、

且定約書も一通及御廻送候条

可成早々赴任相成候様致度、

左期限之儀ハ都合も有之、

十七年六月迄下致候間御承知

有之度、三井銀行ハ駿河町ニ

候間為念申上候

式百六拾円 二ヶ月分月棒前渡ノ分

四十壹円八十銭 赴任旅費

ノ三百壹円八十銭

大谷君ノ謝金ヲ協議ヲ遂ケ、弥々御申越之通差上候事ニ定候、

右同君へ御通知被下、其御承諾之御返事次第為換ニテ金員差送

可申候

赴任前日限確定候ハ、郵便ニテ

御通報相成度候 草々 頓首

十六年四月七日

山本操

佐々木曠殿

(佐々木家蔵資料より。福井県文書館吉田健主任 解説指導)

佐々木曠は四月二十六日に岐阜医学校一等教諭として赴任した。<sup>18)</sup>

大谷周庵は、謝金をもらうことになり、五月に新潟医学校へ赴任した。<sup>21)</sup>

各県医学校は甲種医学校設立に向け第一の要件である三名の医学士獲得のため月俸百二十円〜百三十円の高給を提示し招聘に狂奔した。

しかし他の要件を満たすためには更に費用がかかり、岐阜県のように屢々水害に見舞われ財政的に苦しい県では対応ができなかったものと思われる。

二人との接触に当たっては、相磯と同期、岐阜県大垣出身で後に東京大学外科学教授、医科大学長も務めた佐藤三吉が関係していたことが窺える。

図3 佐々木病院長

四代



佐々木 曠

自 明治十九年三月  
至 明治二十五年三月

(『岐阜大学医学部三十年史付属病院百年史』より)

佐々木曠は岐阜県医学校長、岐阜県病院長(共に第四代)を兼務したが、明治十九年医学校は廃校になり、後継の県病院長として務めた。県財政の逼迫で病院も存続の危機にあった。職員その他雇員の給与の減額など費用節減に辣腕を振るい、県下の巡回診療、水質検査を行うなど積極的な財政再建に乗り出し、明治二十四年に独立採算性を実現させた。

しかしその直後の明治二十四年十月〜明治二十五年二月に起きた美濃大震災では、患者、職員には一人の負傷者も出さなかったが、建物は半壊した。

救護事務は殆ど佐々木院長がやった模様である。普通の患者は副院長一人で担当し、病院長以下全員は門内の野天に天幕を張り手術台を曳きだして救急医務に従事すると共に大垣その他の医療機関か

ら応援を受けた。

愛知県病院（川原汎）、大阪病院（井上）、京都病院（猪野間）、慈恵病院（高木兼寛）、東大病院（佐藤三吉、スクリバ）、順天堂医院（佐藤進）、赤十字宮内省待医局（岩佐登弥太、竹中）、その他中国、四国近県の医師団が来援し、伏見宮殿下、総理大臣（伊藤博文）の慰問もあり、病舎の修理工事は国庫の支弁となり平常に復することできた。その後も佐々木曠は美濃地方の医学、医師会のリーダーとして八面六臂の活躍をした。<sup>19)</sup>

### 新潟医学学校への赴任 浅田決、川俣四男也

既に五月に大谷周庵が赴任し、続いて八月、浅田決、川俣四男也が赴任した。この時の池田謙齋（初代医学部総理）へ出した新潟医学学校長竹山屯の書簡を紹介する。<sup>20)</sup>

明治（一六）年六月一六日

（封筒表） 東京 池田謙齋様侍史御中 新潟 竹山屯

奉謹啓、時下夏氣稍相催候処、御満堂様益御清適被為遊御起居奉大賀候、陳は先般七八日前と覚候長与先生御兩名にて鄙答拝呈奉懇願候淺田、川俣之両氏御地発途之儀御催促被成下度御願申上度候、其節も申上候旅費之儀一般準官史之成規も有之、一日十里詰老円九十銭にて八実二不足、大谷氏へも甚氣之毒二御坐候得共、県庁限取斗候事も出来兼候段、不得已同氏ハ不平も

無之承諾二相成候得共、他之両氏ハ辞令後之赴任旅費二相成候

様仕度と奉存候、幸此度木梨大書記官出京中にて御礼ニ御三君へ被罷出候様依頼仕置候間、長与先生へも御頼置被成下、其辺何とか御取斗、他之両氏之不平無之出発二相成候様仕度奉願上候、扱伝不仕候得ハ先生当初旬より少々発熱、加来咯痰中血点ヲ混候哉之趣、尤も為差御事ニハ被為在間敷候得共、御大切之御身国事御省略十分御撰養為国家深奉祈上候、春中之胃病ハ如何被為在候哉、乍失敬御撰生ハ余リ御注意無之様ニ奉拝察候、何卒精々御注意速ニ御全癒奉懇願候、〔中略〕

達吉子も此度校檢上等之出来と申事、姉上二ても如何様大悦遙察仕候、右ハ御容体為伺仕度呈寸楮候、敏并ニ達吉子ニ御申付、御容体拝聴仕度候、草々謹言

六月十六日 屯拝

池田先生玉案下

池田謙齋はこの時期肺結核で胃も患っていた。達吉子とは謙齋の甥、入澤達吉である。

明治（一六）年七月三一日

（封筒表） 東京 池田先生虎皮下 新潟 竹山屯

奉謹敬候、時下炎熱之候御満堂様益御多祥御起居被為遊奉賀上候、

〔中略〕

先生御不快も尔来全快氣之由、大慶ニ奉存候、御撰養緊要ニ奉  
祈上候、六月廿日之尊翰正薰誦仕候、

淺田川侯之二氏も本月廿日比月給旅費前送りいたし、八月一日  
發途之報知有之、大ニ安心仕候、

〔以下略〕

恐々謹言

七月卅一日

竹山屯

池田先生閣下

明治一六年七月二十八日 上野く熊谷間の鉄道が開通した。その  
後の道程は人力車、馬車などで三国峠を越え、信濃川から乗合い蒸  
気船で新潟に到着したものと思われる。

池田謙齋は新潟県出身であり、彼を通して医学士の赴任を依頼し  
たものと思われる。

これで甲種医学校として認定される医学士三人の教授陣が揃った。

明治十六年末の県立甲種新潟医学校の職員構成は次の通りである。

三医学士とも校長より高級の月報百二十円であった。

図4 明治十六年末新潟医学校職員  
（『新潟大学医学部七十五年史』より）

一等教諭	校長	百円	竹山屯
同	医長	百貳拾円	大谷周庵
同	同	同	淺田決
同	同	同	川侯四男也
二等教諭	渠局長	六拾五円	高橋三郎
三等教諭	医員	六拾円	高野陸成
同	教場監事	同	若林亭
三等教諭	医員	五拾五円	田村寛逸
書記	監事	三拾円	長谷川三郎
二等助教諭	医員	貳拾八円	田中鼎
同	医員	貳拾五円	源哲次郎
二等助教諭	医員	同	野木武存
		貳拾五円	中村百合之充

書簡三

明治（二六）年二月二七日

（封筒裏） 東京神田区駿河台北甲賀町九番地 池田謙齋先生

奉煩親展

（封筒裏） 十二月廿七日夜十二時 新潟港東中通 竹山屯

本日十七日之尊書正薰誦、如貴示嚴寒之候先生益御勇猛奉拝賀  
候、陳は先般学士昇級之云々申上候処、縷々蒙御教示難有奉謝  
候、大谷氏へ打明相晰候処、同氏ハ敢て昇級ヲ望居候様子も無  
之、却て淺田之方増給ヲ待候様子ニ御坐候、依て県官え談し書

記官へも申上候得共、何分県令不在中ハ取斗兼候趣、然ラハ賞与又ハ慰勞ノ儀取斗被呉候様申立候得共、是も勤務之日浅、夫々規則も有之候得ハ、直ニ取斗兼候、夫等之賞与之儀ニ付何か文部省へ伺候様之晰様ニて、何れ二月県令帰県迄待呉と申事、不得已儀ニ御坐候、差当何も不平ハ無之候、唯淺田ナルモノ校長之任ヲ望候様子、依て幸之儀小生も一昨年来入家被催候得共、漸々今日ニ至り候処、過般中野よりも龍保ニてハ家事治兼、且同人も利己主義ニて後來無覚束故、母ハ直ニ隠居為致候間、明年ハ是非入家可致様被申談候間（尤も小生戸主ニ相成居候）永クも勤務無覚束事故、同氏ヲ校長ニいたし度候得共、県令書記官ニて直ニ承諾ニ相成候哉否ハ（<sup>22</sup>）誤り兼候、学士も赴任以來日尚浅、地方之状況も不詳悉故性々高尚ニ流候様之儀も有之、旁以て直ニ承諾之有無如何と心配仕候

〔後略〕

恐々頓首々々

十二月廿七日夜

竹山屯

池田先生煩御親展

一等教諭淺田決は、赴任するなり給料の増額と校長の職務を要求した。翌十七年には百三十円に増額され、竹山屯は校長の兼任を解かれ附属病院院長の専務となる。淺田は十七年四月辞して長野医学校長として転出した。

五月には校長に県一等属で学務課長であつた長倉雄平が任ぜられ

た。

六月には、明治十七年東京大学医学部を卒業した松崎廉が一等教諭兼医長として赴任する。

また一等教諭大谷周庵は十七年八月辞して熊本医学校に去り、九月には同期生の秋田県病院長であつた緒方太郎が一等教諭兼医長として来任した。川俣四男也は明治十九年新潟医学校を辞職し、海軍大軍医に任官したが、明治二十年十二月新潟に戻り開業した。医学士の移動が激しい時代であつた。

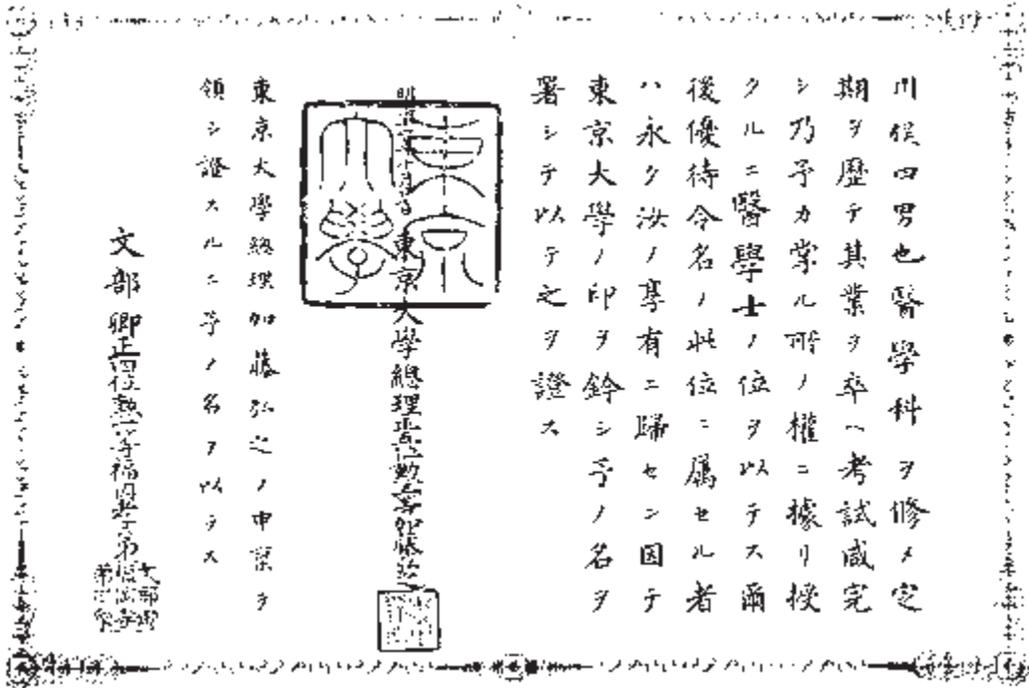
#### 学位授与

十月二十七日に東京大学四学部の学位授与式が挙行され、在京または地方に赴任した卒業生に「官報」を以て出席するよう広告を出した。式の模様について小関恒雄氏が詳述しているが<sup>(22)</sup>、

『文部省第十一年報（明治十六年）』には、

「明治十六年十月二十七日午後二時ヲ以テ前學年卒業ノ法理醫文學部卒業ノ學生六十七人ニ學位ヲ授與ス 即チ法學科八人 物理學科一人 化學科八人 機械工學科三人 土木工學科四人 地質學科二人 採鉱冶金學科四人 醫學科廿六人 製藥學科一人 哲學科一人 政治學及理財學科九人トス」其姓名ハ卒業證書を授与セラレシ學生ナレバ略」此日招請ニ由テ臨場セシ内外人ハ佐々木参議米合衆国特命全權公使ビングハム露国特命全權公使タウキドフ以太利国代理公使マルタン、ランチャーレスヲ首トシテ無慮二百余名ナリ」とある。

図5 学位記（東京大学医学図書館蔵）



また河本重次郎は

「明治十六年十月二十七日医学士の位を授けられる。其節は一橋通外国語学校向側にある大講堂にて一々姓名を讀上げ授与式おこなはる。」と『回顧録』で述べている。

四学部統合後も明治十六年には本部は未だ本郷に移転せず、神田の旧東京開成学校にあったものと思われる。

法、文、理、医学部とも、学科および姓名が違うのみで。学位記は同文である。

この他にも明治十六年の同文の医学科学学位記は、北里柴三郎（学校法人北里研究所蔵）、佐々木曠（佐々木家蔵）、鶴崎平三郎（鶴崎家蔵）のものが現存している。

博士を以て学位とする学位令が出されたのは明治二十年である。それまでは「医学士」は「学位」であり、その後は「称号」とされた。

おわりに

東京医学校時代には入学ルートは画一的ではなく種々あり、多様な人材が大勢全国から集まった。

ミュルレル、ホフマンによる予科三年、本科五年の医学教育制度は成功し、その後も受け継がれたが、結果的には少数精鋭の研究者、教育者の養成になり、卒業生の多くは地方の府県立医学校から高給で迎えられた。

しかし明治二十年に出された勅令により、府県立医学校の費用を地方税で支弁することが禁じられると、医学校の淘汰が起こり、そ

の結果、教官で開業する者も増え、医師の養成には尚時間がかかった。本科生のみでは、明治政府の要望した西洋医学の導入による国民の治療、衛生レベルの早急な向上は望めなかった。

明治八年、ミュルレル、ホフマンの帰国に合わせたかのように、東京医学校にドイツ留学生を教師とし、日本語で医学教育をする別課（当初は通学生教場と呼ばれた）が設けられ、より多くの医師が短期間（四年）で教育された。別課は明治十八年に募集を中止し、同二十二年廃止されたが、この間明治十二年からの卒業生総数は約千百名に達した。卒業生の中には後の京都帝国大学医科学長、総長も務めた荒木寅三郎もいる。

また明治八年の予備段階を経て、同十六年には医術開業試験規則が制定された。医療機関で補助業務をした者が医学予備校（済生学舎など）で学び、物理、化学、解剖、生理、病理、内科、外科、薬物学などの科目の試験等に合格すれば医師として開業資格を与えられ、明治、大正期の地方の医療に役立つた。

この制度からも野口英世、吉岡弥生など優れた人材が輩出した。

太平洋戦争後は六年制の大学医学部、医科大学に一本化され、更に研修期間二年が追加されたが、昨今の時代のニーズに対応できず、特に地方の医師不足を来している。医学部の若干の増員も考えられているようであるが、これでは間に合わない。

明治初期の医学教育制度では、例えば①東大本科卒業生、②東大

別課卒業生、③府県立医学校（専門学校）卒業生、④医術開業試験合格者のように医師になる多様な選択肢が用意されていた。

高度の技術や新しい知識が必要であることは言うまでもないが、患者の悩み、苦しみを能く聞き取り、対策を適切に説明できるコミュニケーション能力を持った医師が多く望まれている。

制度④のように、医療業務に従事し、患者について豊富な経験を持った人たちに、医学教育の機会を与え、国家試験により医師の資格が取れる制度も今後地方医療充実の一策と考える。

#### 謝辞

本稿について、資料のご提供およびご指導をいただきました元新潟大学医学部 小関恒雄先生に深謝申しあげます。

資料並びにご教示を賜りました永井良三 東京大学大学院医学系研究科循環器内科学教授、高橋昭 名古屋大学名誉教授、加我君孝 国立病院機構東京医療センター臨床研究センター長、大谷育夫先生、川原哲夫先生、鶴崎隆一先生並びに君江夫人、劉燦太郎先生、元北里研究所 大岩留意子博士、福井県文書館 吉田健主任に厚くお礼申し上げます。

前報および本稿執筆に当たり、多数の資料を快く閲覧させて下さった佐々木美智子様（佐々木曠先生のお孫様の夫人）がこの間に

急逝され、謹んで本稿を佐々木美智子様に捧げます。

### 参考文献

- (1) 川俣昭男「明治初期東京大学医学生 川俣四男也 その学生生活を中心に」『東京大学史紀要』第二十三号 東京大学史史料室 二〇〇五年三月
- (2) 『長崎医学百年史』長崎大学医学部 昭和三十六年三月
- (3) 高橋昭『明治時代日本医学の泰斗 川原汎先生』川原哲夫発行 平成三年二月
- (4) 「故評議員川原汎翁遺事」『中央医学会雑誌一四一号再版付録』大正八年一月
- (5) 宮島幹之助編『北里柴三郎傳』北里研究所 昭和八年八月
- (6) 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍 昭和五十七年九月
- (7) 藤田俊夫「ヨンケルとシヨイベー京都府療病院の外人教師たち」『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社 昭和六十三年十二月
- (8) 『東京外国語大学史』資料編 東京外国語大学 二〇〇一年三月
- (9) 河本重次郎『回顧録』東京帝国大学医学部 河本先生喜寿祝賀会 昭和十一年四月
- (10) 大谷彬亮『醫者大谷周庵』自刊 昭和十年十月
- (11) 鶴崎範太郎、鶴崎隆一『須磨浦病院創立一〇〇年』自刊 平成元年十一月
- (12) 鍵山 榮「佐賀県医師会初代会長池田陽一」『医界風土記 九

州沖繩篇』平成六年一月

- (13) 大岩留意子「北里柴三郎余話Ⅱ」『THE Kitasato』第五十六号 北里研究所 二〇〇七年十月
- (14) 小関恒雄、北村智明訳編『クニッピングの明治日本回想記』玄同社 一九九一年六月
- (15) 入澤達吉「明治十年以後の東大医学部回顧談」『雲莊隨筆』大畑書店 昭和八年二月
- (16) 加我君孝「医学歴史ミュージアムの紹介(8)」『東大病院だより』No.60 東京大学医学部附属病院 平成二十年一月
- (17) 『医学生とその時代』「東京大学医学部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み」東京大学医学部・医学部附属病院創立一五〇周年記念アルバム編集委員会 二〇〇八年四月
- (18) 『岐阜県教育史』通史編近代1 岐阜県教育委員会 平成十五年
- (19) 『岐阜大学医学部三十年史付属病院百年史』岐阜大学医学部三十年史・付属病院百年史編集委員会 昭和五十二年四月
- (20) 池田文書研究会 池田文書の研究(二十九) 『日本医史学雑誌』第五十二卷第三号(二〇〇六年九月)
- (21) 『新潟大学医学部七十五年史』新潟大学医学部学士会編 一九九四年二月
- (22) 小関恒雄「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽(二)」『日本医史学雑誌』第三十六卷第三号 平成二年七月

(かわまた あきお)